

主題図「世界から集まる日本の食料」で伝える地図の魅力と威力

京都大学教授 金坂清則

はじめに

半年前私は、『新編 中学校社会科地図一初訂版－指導書－活用・研究編－』冒頭の小論において、魅力にあふれたこの地図帳をより活用するために留意してほしい事柄について、大学で地理学以外を専攻し、現在地理を担当している教員にも「なるほど！ やってみよう」と思ってもらえるようにとの思いを込めて記した。本稿ではその思いを一つの主題図を例に述べてみたい。これだけを読んでもわかり、実践してもらえるように記すが、前稿を併読していただければありがたい。

1 主題図「世界から集まる日本の食料」の意義

取り上げるのは、本地図帳の119～120ページの主題図「世界から集まる日本の食料」である（本号表紙3所収）。「日本の食料と世界との結びつき」というテーマの最初の地図であり、本テーマ全体に関わるようになってきている大切な地図である。

このような地図自体は、主題の重要性ゆえに、30年前から掲載されてきたが、その内容も関連図を含めた構成も、指導要領の改訂なども踏まえて改善を重ね、今に至っている。

しかも、食料をめぐる問題が、日本が考えるべき最重要課題の一つであることが、社会で広範に強く認識され、生徒の意識にも上ようになってきている近年、社会科地理がこの問題を考えるうえできわめて大切であり、地図によって考えることが有効であることを、実感を持って生徒に認識させるうえでも、この地図は重要である。

したがって、この地図について、「複雑すぎて使えない」というような判断を教師自らが下して生徒と向かい合うというようなことがもしあれば、

それは幾重にも遺憾である。

本稿では、この地図の内容の豊かなことが、「複雑で使えない」どころか、「言葉」にはない「地図」の威力を生徒に実感させることに結びついていると指導者に実感してもらえるよう、その活用法を記してみたい。

2 主題図「世界から集まる日本の食料」の活用法

1) 盛り込まれている内容の確認 一本図活用の第一段階

この地図にどのような内容が盛り込まれているかの確認をまず行う。

この図には、大きく分けて四つの内容が示されている。すなわち、

- ①おもな国の日本への食料輸出額
- ②各国の食料輸出額にしめる日本の割合
- ③おもな食料の輸入先と輸入額、そして
- ④魚の種類および、a) 日本のおもな漁場、b) 日本のおもな海外漁業基地、c) 排他的経済水域という、漁業に関する情報である。

このことは、凡例にも記されているので、どの生徒にもわかるだろう（排他的経済水域という用語はむずかしいが、定義が示されているので、一応理解させ先に進めることができよう）。

2) 四つの内容それぞれの読図とそのため の方法一本図活用の第二段階

そこで、次には、この四つの内容を個々に読み取る作業を、教師自らも行いつつ生徒に行わせた。ここで肝要なのは、本図の白黒コピーを一人当たり4枚準備し、それぞれに色鉛筆やマーカーで着色させつつ考えさせるということである。

その際、4枚を一度に配らず、1枚目のコピーを用いた作業とそれに基づく読み取りをきちんと

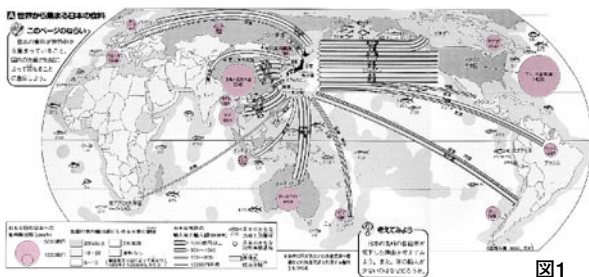


図1

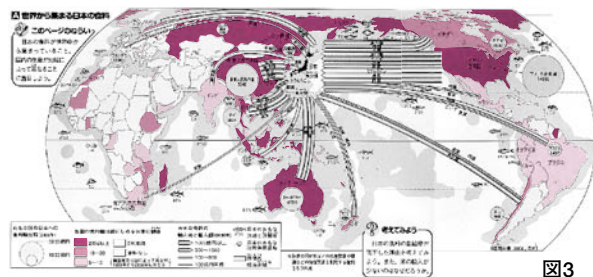


図3

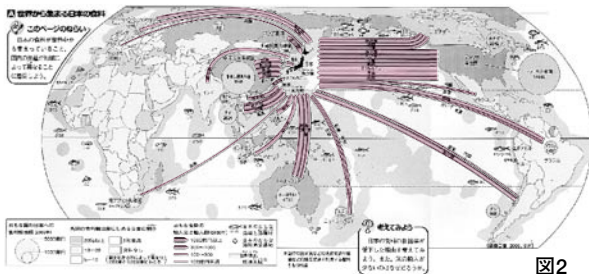


図2

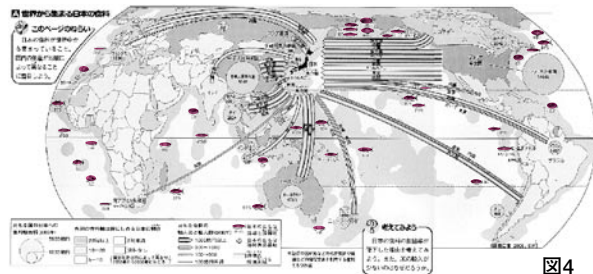


図4

「中学校社会科地図 初訂版」 p.119~120

すませてから2枚目に移り、同様のやり方を3枚目、4枚目でも繰り返す、取り組ませる。一度に配って作業すると、四つの図に分解して考えるというねらいが生徒に徹底せず、作業の意義は格段に低下する(そして、実際に作業を行うことによって、図の読み取りが容易に行えるだけでなく、この地図に込められたねらいや、地図表現の独自性までも生徒は実感でき、興味をもつはずである)。

まず1枚目のコピーに、「おもな国の日本への食料の輸出額」を示す円だけを着色させる。色は、後の作業も考慮して原図と同じピンクか赤一色にするのがよい。その際、生徒には、輸出額の多い国から順に塗っていき、円のそばに順位を赤や緑・青のボールペンで書くように指示したい。こうすることにより、生徒は日本がどの国に食料を頼っているのかを、空間認識を伴って理解できる(図1)。

ここで大切なのは、円で表現されている国をやみくもに覚えさせるようなことはしないことである。アメリカ合衆国と中国・オーストラリアが三大主要国であることぐらいは、とくに「覚えなさい」といわずとも、生活体験とこれまでの作業によって無理なく頭に入るだろう。それで、これら3国のほか、タイ・カナダ、さらには、チリやフランスという、生徒にとってはおそらくは意外な国々も、日本への食料輸出額の多い国になってい

ることに驚いてくれればそれでよい。

この作業によって生徒は「おもな国の日本への食料輸出額図」という表題の地図を自分でつくれたことに喜びを感じるだろう。それをノートに貼らせれば、自分のオリジナルなノートをつくる楽しさも湧こう。

このような作業をした生徒は、教師が問いかけずとも、どんな食料を外国に頼っているのだろうと思うはずだから、次に、2枚目のコピーを配り、それに、鉛筆状の流線で表現されている「おもな食料の輸入先と輸入額」を色で塗り分ける作業を行わせよう(図2)。

流線の太さによって輸入額が表されていることや、流線が、それぞれの食料を日本に輸出する国から日本に向かうように表されていることは、敢えていわずともわかるだろうが、念のため確認させたい。そのうえで、食料の種類ごとに原図に近い色を塗っていくが、色だけでなく種類が記されているので塗り落とすことはないだろう。

色は、牛肉問題が食料への関心の出発点にもなったので、まず、肉類、ついで魚介類、その後、多くに分かれている農作物に移り、小麦・だいたい・とうもろこし・野菜・果実という順に塗っていくとよいだろう。こうすることによって生徒は、品目によって輸入する国に多少の違いがあること

を確認できる。生徒が思い描く果実を列挙させてもよい。

以上によって、日本が外国に頼っている食料を、金額と食料の種類という二つの面から理解できたのをふまえ、次に、世界の各国にとって日本への食料の輸出がどのような位置をしめているのかを考えてみたらどうなるかという問いかけを行うとともに、3枚目のコピーを配り、割合が5%以上の国に限って着色させ、「各国の食料輸出額にしめる日本の割合」という図を作成させたい(図3)。

色としては、原図の色調にも合わせ、赤・オレンジ色・黄色がよいだろう。この作業によって生徒は、本当に世界中の食料に頼っているのだということが実感でき、明記されていない国名を調べようとする生徒もでてくるだろう。

最後に4枚目のコピーを配り、「魚やえび・かになどを合わせて、むずかしい言葉だけれど魚介類というのだよ」と断ったうえで、たとえば、まぐろ・かつお・さけ・ます・たら・にしん・たい・かれい・さんま・いか・えび・たこの順に、イラストにイメージの色(たとえば、たいは赤)を塗らせていく。そうすることによって、生徒はそれぞれの魚介類をどこでおもに獲るのかについてもいろいろの発見をし、声をあげるかどうかはともかく、大きな驚きを感じるであろう(「日本のおもな海外漁業基地」の立地はさておき、排他的経済水域との関係についての読み取りは省いてもよい)。

3) 四つの内容の相互の関連の読図

一本図活用の第三段階

以上によってオリジナルな4枚の図の作成と読み取りを行った生徒は、その作業の中で、この地図に盛り込まれた四つの内容の相互の関連についても、いろいろなことに自然に気づくだろう。そのことを授業中に発表させたあと、短いレポートを書かせるところまでいけば理想である。

4) 関連する地図の活用

一本図活用の第四段階

このようにして、わずか1枚の地図から、本当にたくさんのことを読み取れるのだなあということと、自分たちが毎日食べているものが世界中からもたらされているのだということ、もし輸入で

きなくなったら大変なことになるということを実感を伴って理解できた生徒は、①このような日本の食料事情が、他の国と比べてどうなのか、②いつからこのようなことになったのか、③それはどのような理由によるのか、といったことに関心をもつだろう。そのとき、この地図の下にある三つのグラフ(表紙3)は実に有効であるし、日本で農産物や畜産物がどこでどのように生産されているのかとか、おもな漁港や水産物のおもな輸入港がどこにあるのかを示した地図も生徒の関心をひき、それを読み取りたいという気持ちにさせるだろう。食料の消費と生産との関連についても注意を喚起していただければよい。

3 結び

本図に関わる内容は教科書のうしろの方で扱われるので、これを学習する頃には生徒の地理的能力も向上しており、その意味でいっそうこの地図は「複雑すぎて使えない」というようなことがないものとして活用できる。だが、地図の魅力と威力を入学したばかりの生徒にわかってもらい、中学における地理の学習にあって地図がとても面白く役立つことを実感させるためのガイダンス的な授業の中で、この図を活用してもよいと思う。

本稿の目的は一つの地図を例にした地図の活用法を示すことだったが、それにとどまるものではない。白黒表現とカラー表現では、示せる内容に大きな差があるという形で、カラーの地図の威力を示したうえで、その白黒コピーを活用し、それに自ら着色することによって、図の内容を分析させるという方法の普遍的意義を示せたと思う。

「どこ」ということを抜きにして私たちの暮らしも人間の活動もありえず、そのためには、ヒトやモノ・情報の流れを理解することが不可欠であり、そのためにはこれらのことを直截的に表現する地図が不可欠であるということ、生徒はもちろん教師にも心から実感してもらいたいと思う。地域の結合関係を理解させることは社会科地理に課せられた課題であり、本地図帳には同種の地図がいくつも収められており、本稿で述べた方法は、それらにも応用できると考える。

